

## 吉備に於ける備後地方の性格

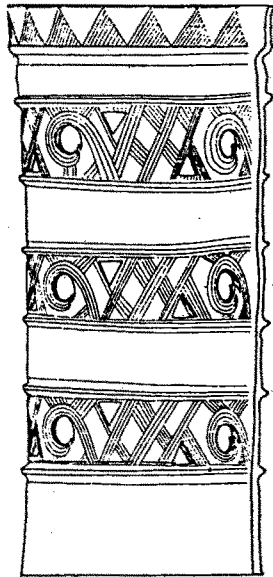
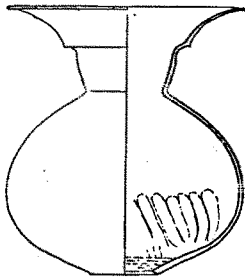
山口哲晶

吉備の国は、現在の岡山全県と広島県の東半部にまたがり、瀬戸内海に面する山陽路の真中に位置する。気候は温暖で土地は豊かである。縄文晩期に北九州で始まった水稻農業の発展の条件を、<sup>①</sup>水田造成の為の沖積層の広がり、用水源としての河川の水量と貫流の仕方、水田利用の極限としての現代の二毛作田の面積、の三点を取り上げ、畿内と吉備と北九州の三地域を各々比較してみると、農業生産力に於ては畿内が圧倒的に優位に立ち、吉備がこれに次ぎ、北九州はやゝ劣る。又、政治勢力の結集の難易を地形的条件から見てゆくと、畿内は奈良盆地という一つのまとまった自然地域をもつとともに、淀・大和の二大河川で三区区分されるが、又、有機的に結合し得、いくつかの政治集団の割拠とその統合を可能にし得たのである。吉備の場合は、いくつかの政治集団がほぼ同じ様に割拠し得る条件を備えていたといえよう。北九州ならば、平野が三つの地域に分断されており、大形の政治勢力の結集に不利であったといえる。こうしてみると、吉備はこの面でも畿内に次ぐ有利な条件を備え、北九州に抜きんでいた。以上の様に自然環境の諸条件のもとでも吉備という国は、畿内に次ぐくらいの大勢力に成長し得る土壌はあったのである。

こういう条件のもとで、弥生時代中期以降、同一小地域内に於て、一個の世帯共同体とみられる集団の共同墓地内に、家父長世帯が台頭してき、その墳墓が一步づつ古墳に近づいてゆく推移は、吉備に限らず他地方にもみられるが、近畿に於て方形墓が前期末に始まり、中期以降は群在化する傾向があり、その先進性を認めざるを得ないが、ほとんどが平地に立地し、方形周溝墓と呼ばれる様な遺存状態を示しているのに対し、吉備では、基本的に丘陵上に立地し、円形のものをも含み、遂には、方墳と区別できないまでに発達してくるのである。

さらに吉備では、<sup>④</sup>北部九州に源流があるとみられる竪穴式石室を近畿に先立って導入している事や、特に特殊つぼと特殊器台を創出し発達させた点は、首長靈祭祀の独自性として明確に近畿や他の地域と区別される。この特殊器台と呼ばれる土器は、兵庫県から岡山県井原市、あるいは備後でも、山陰の島根県でも出土し、吉備の勢力範囲と思われる地域に分布しているが、中心はやはり吉備の中核地域の岡山県南部であり、やがては円筒埴輪に転化してゆくのである。とにかく、古墳の出現期に於ては近畿は優位な立場に立っていたとしても、吉備では首長靈祭祀の形態が、近畿と異なる独自性を持っていたと言う事ができる。

初期の古墳の規模と数を見るならば圧倒的に畿内の方が優位な事は明らかであるが、その中で、吉備創出の特殊器台は畿内に伝わっているのである。奈良県桜井市箸墓古墳からは宮山型の特殊器台が、<sup>⑤</sup>又同系統の文様を刻んだ木製品が桜井市石塚古墳の近くからも検出されている。そして又、宮山の特殊器台に継続する初期円筒埴輪も吉備に於て成立し、近畿に及んでいる。すなわち、箸墓古墳からは吉備的な有文円筒埴輪が検出され、同時に近畿的要素の強い文様・技法のものもあるし、吉備の特殊壺の形態を強く残しながら埴輪化したものもある。又、京都府向日市の元稻荷古墳からも有文円筒埴輪と壺が検出され、奈良天理市の手白香皇女陵と伝えられる西殿塚古墳からも同様のものが出土して



0 15cm

図1 岡山市都月1号墳出土の有文円筒埴輪と壺形土器(近藤・春成「埴輪の起源」による)

いるという。

この様に古墳を構成する要素の中で重要な埴輪が吉備に起源し、早く近畿に受容されたという事実は、古墳成立時に於ける近畿の主導性・優位性が絶対的なものではなく、互いに同化し合っていた事を示すものであろう。近畿と吉備の各首長達はお互いに相争う事よりも同化する事にあるいは努力していたのかも知れない。こうする事により、自らの勢力を確実なものにしてゆくのが、安全で確実な方法であると考えたのであろう。

この様に古墳時代前半期に於ける、吉備と近畿との関係は未だ、吉備の主体性を否定するまでには致っていない。

五世紀前半の古墳時代発展期になると、吉備政権の中枢地域に突如として全長三五〇メートルの巨大墳、造山古墳を築く。その後には二八〇メートルという作山古墳が続いて築かれている。この時、同時期の他の古墳をみると、一五〇メートル前後の現状維持、あるいは規模が縮小してしまっている。この事は、吉備の大王家を中心にして諸部族の結束がいかに強くなっていたかを示すものであろう。

近畿の大王陵に匹敵する程の巨大墳を築き得た吉備政権は次の様な物質的基盤の上に成り立っていた。先ずは沖積平野である岡山平野の豊かな農業生産力、加えて豊かな労働力を擁し、鉄製農具を整備し、耕地の拡大と増産を図った。というのは、巨墳を築き得たところから言えよう。次に中国山地と吉備高原の林産・鉄・銅及び瀬戸内海の塩等各種の天然資源を包蔵し、その開発利用をした。周知の通り、鉄と塩は、近畿や他の諸地方では大量生産はきかず、吉備の特産であった。とりわけ、鉄に関しては、五世紀の近畿政権の有力首長墓に鉄製武器が大量に副葬されているが、それらの生産がどこでなされ、近畿政権がどの様にそれに関与していたのかは判然としない。

ところが、吉備に於ては五世紀代に瀬原町の月の輪古墳の墳頂部に鉄滓が存在したことからみれば、四世紀末から鉄の生産体制は確立していたのである。

この様に吉備が鉄の量産体制を持っていたという事は、鉄製武器の装備を通して軍事力の強化には極めて有利であった。加えて四世紀代の吉備中枢の首長墓が、岡山市湊茶臼山古墳をはじめとして、岡山平野と瀬戸内海の両面に臨んで造営されている事や、牛窓湾の様に四世紀末から六世紀前半にかけて首長墓が営まれている事は、瀬戸内海に於て最も有力な海上活動集団、つまり水軍を保有していた事が考えられる。それゆえに、現在造山古墳の前方部に置かれているくり抜き式長持形石棺や、山陽町小山古墳の舟形石棺は、九州阿蘇の凝灰岩であるときれている点、あるいは、牛窓湾内の黒島の黒島二号墳をはじめ、いくつかの古墳から新羅土器が出土している事や、福山市本谷二号墳から目下列島唯一の双竜文石釧が出土しているという事を考える上に水軍の保有という事を考えれば納得できる

のである。

<sup>⑬</sup>この様に、日本列島に於て近畿に肩比する地位にあった吉備政権は、当然近畿政権と並んで、あるいは近畿政権に代って、古代国家統一に向う進路に於て、中枢たりうる可能性を持っていた時期があった事は否定できない。記紀の中の近畿政権の各地征服の物語にはしばしば、吉備の首長が加担し、重要な役割を演じているのも五世紀代の近畿政権とともに、その動きの中心的地位にあった事を意味しているのであろう。

<sup>⑭</sup>五世紀に於ける吉備政権の大首長が、相ついで近畿の大王墓に匹敵する巨大前方後円墳を築いたという事は、吉備の政治的・軍事的・経済的な実力の強大さの誇示に他ならないであろう。しかし、同時にそれは、吉備の首長が近畿政権と一層密接な関係になっていった事でもある。吉備の首長墓をみる時、吉備の独自のものを発展させるのではなく、反対に独自性を失い、近畿色の中に溶け込んでいく傾向を見せている。前方後円墳の普及、造り出しの付設、堀をめぐらす、陪塚を伴う、長持形石棺を用い、形象埴輪にも特徴らしいものがない等の点は、まさに近畿化の現れである。

この様に五世紀前半頃までは、近畿政権とはかなり同調的な姿を呈しているが、五世紀後半頃から対立関係に入ってゆく。それは、<sup>⑮</sup>基本的には、首長層の目ざす地域的結束の路線と、近畿政権が列島の中心に君臨せんとする路線との対立矛盾であった。そういう中で、いくつかの有力地方政権は近畿政権に反発を始めた。その中で吉備は、卓越した特色ある経済的基盤、とりわけ鉄の量産体制を確立させる事により、極めて有利な立場に立っていた。この事は、近畿政権にとっては大きな脅威となった。又、吉備が、近畿から九州地方に向う海陸の中間地点にある事も近畿政権にとっては不都合であった。北部九州をはじめ、西日本各地を服属させる為には、先ず吉備を屈服させる必要が不可欠となったのである。

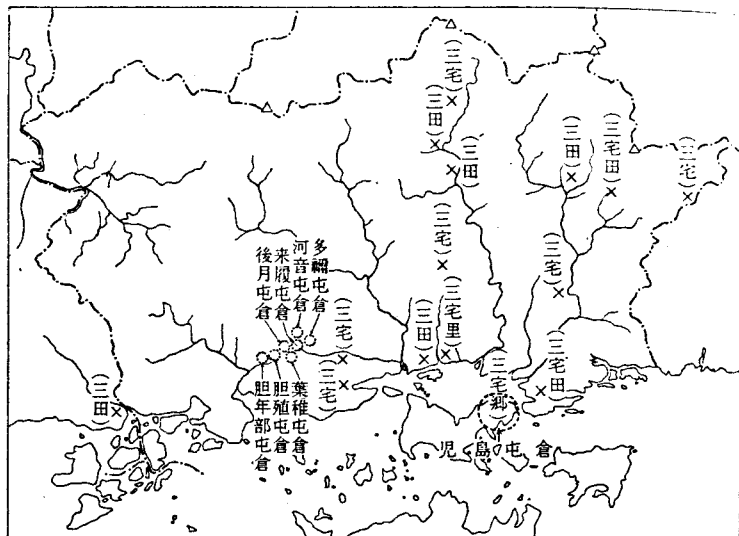
<sup>⑯</sup>「日本書紀」雄略七年条に、下道臣前津屋の大女と小女や、大雄鶏と小雄鶏と闘せて大王を呪ったという説話や、同年条の朝鮮に渡った上道臣田狭が、妻稚媛を大王に奪われた事に怒り、新羅によって反抗したという説話、そして後日譚としての清寧即位前記に、星川皇子の大王位篡奪のクーデターに上道臣が加勢せんとして挫折した説話が載せられている。所謂、吉備の反乱記事である。

吉備のこの反乱に敗退した五世紀末頃、吉備の中枢部の大首長墓に径百メートル前後の、そして間もなく、数十メートルの帆立貝式古墳が多くなる。こういう現象は吉備に限らず各地の有力部族もほぼ共通するが、この事は、近畿の覇権が列島各地に及んできた事を示しているであろう。又、「上道」・「下道」の様に近畿を中心として、近畿側に向い近い方を「上」として呼ぶことも近畿政権の優位性の現われである。

<sup>⑰</sup>六世紀になると、吉備の中枢東端にあたる大伯の長船に船山古墳という前方後円墳が出現する。これは、前方部が極端に開き、かつ高い特異な形態をしている。この形態は真に近畿の大王墓陵に比定されている、伝清寧陵・伝安閑・伝仁賢陵と同じ特徴をもっているのである。という事は、再び近畿の大王とこの地の首長との間に密接な関係が成り立った事を意味している。

しかし、いくら再び吉備と近畿政権とが、密接な関係になったとはいえ、当然吉備の反乱以前との様な融和的なものではなかったであろう。反乱に於ては吉備は敗退したのであり、その結果として、近畿政権が優位に立っていったのは明らかである。ところが、後に吉備の周辺より、近畿政権の大王

の直割地である屯倉を設置し、吉備の力を封じ込めてゆき、最終的には、中枢部にクサビを打ち込むが如く屯倉を設置してゆく過程から見ても、いくらクーデターに敗退したとはいえ、近畿の大王陵に肩比する程の巨大墳を築き得た吉備の力はそう簡単には消滅しなかった。まだ相当の勢力を保持していたことを意味しているのではなからうか。それゆえに、除々に吉備の勢力を削いでゆく方法を取ったのであろう。



ミヤケ ミタの地名と屯倉推定地

西川 宏「古代の地方史」による

「ミヤケ」・「ミタ」の地名が各地に残っている事からも推定できる。特に美作地方のそれは、後の出雲街道に沿っているし、庭瀬の三宅里や、児島の三宅郷、金光町の三宅等は港灣と考えられるだろう。吉備の屯倉群が、この様な交通路を押える軍事的機能を持つと同時に、農民集団を掌握したという事を意味している。又、海浜の児島や庭瀬の屯倉では、付近に製塩土器を出土する遺跡があり、奈良時代に調として塩を負擔している事から製塩、ひいては水産集団を掌握するものであった事を物語っている。

そういう中に於て、もともと吉備の勢力範囲内であった西の地域に、吉備の中枢部とは異なる変化が起きてくるのである。

後に備後と呼ばれるこの地域は、吉備の中枢部より帯状の平野を通過して直結した地形にあり、芦田川や各支流などの河川もあり、又、瀬戸内海へも近く、所謂、吉備西部に於ての中心であった。

この吉備西部中心地域であった深安郡神辺町から府中市にかけての平野に多くの古墳が築かれているのは周知の通りであるが、それらを古墳時代前半期の四～五世紀に限ってみると、吉備の中枢部の様な巨大墳は一基もない。その時期の代表的な三角縁神獸鏡を出土した福山市の掛迫前方後円墳、芦品郡新市町の潮崎山前方後円墳にしてもせいぜい40～50メートルの規模であり、さらに備後北部の三次市や庄原市地域の前方後円墳群に比べても、墳丘規模に於てはむしろ劣っているのである。ところが、古墳時代後期六世紀になると福山市駅家町、掛迫古墳の近くに大形の、しかも古い形式の横穴

「日本書紀」安閑記二年条に列記されている三十六の屯倉のうち、吉備西部に置かれたと記されているものが数多くみられる。しかも、後の備中、備後の国境の山陽道にあたる狭い地溝帯に郷程度、もしくはもっと小規模のものが集中的に置かれたとみられる。これは、陸上交通の要地を押えるためのものであった事は明らかである。この他にも数多く設置されたらしい事は、「ミヤケ」・「ミ

式石室をもつ山の神前方後円墳や、これも又大形の横穴式石室をもつ二子塚前方後円墳が現われてくる。これらの古墳の墳丘自体は、山の神古墳が40メートル、二子塚古墳が70メートルととりたてて巨大とは言えないが、横穴式石室を主体とする後期の古墳が前方後円の形態をとるという事自体重要な意味を含んでいる。

当時の列島の中心地域の畿内にさえ、この様な形式の古墳は数基しか知られておらず、吉備全体に於ても総社のこうもり塚等三基しか知られているにすぎないという事からも、吉備の反乱を境にして、吉備の西部に新たに次代をになう勢力が出現して来た事を意味しているであろう。

それは、在地の豪族が、吉備包括の為に進出して来た畿内政権と結びつきを強めた結果であるのか、あるいは、畿内政権自体が直接に進出して来た結果であろうと推測できるが、このどちらかは未だ検討の必要があろう。

この後の備後における古墳時代後期から終末期にわたる古墳はかなり特殊である。大佐山白塚古墳・曾根田白塚古墳・猪の子古墳・尾市古墳等、当時の畿内でも主要な氏族しか使用しなかった花崗岩の切石で築かれている事や、石と石との間隙に漆喰の施されている事や、さらには横口式石槨の構造を持っている点に於ては、畿内を除けば、全国的にも稀有な事であり、この事からも屯倉設置以来の畿内政権とのつながりの深さを知る事ができるだろう。漆喰については、「白塚」と呼ばれている通り、壁面に漆喰が施されていた可能性も考えられ、又、硬度の高い花崗岩を削る技術は、当時の畿内政権と密接な関係にある瀬戸内沿岸の勢力が朝鮮より新技術を畿内に伝える中継点の役割を果たしたのかも知れない。そういう中で、新技術を持った工人集団が、この地にも拠点をおいた可能性は充分にあり得るだろう。

そういう特殊古墳の中でもとりわけ珍しい形態をとる古墳がある。石槨が十字形の平面を持つ尾市古墳である。この古墳は前述の通り畿内色のかかなり濃い特長をもち、しかもそれが十字形の平面を持つという点に於てさらに特殊なものである。ただ、奈良県の牽牛子塚古墳の一つの石室を間仕切り、二つの部屋としている様な点に於てその起源を求められるかも知れないが、今後の充分な検討が必要であらう。

ここにもう一つ注目すべき地域がある。安芸の東南端地域、今の豊田郡本郷町である。この地域も古墳時代前半期には注目される古墳はなく、ただ五世紀末頃の兜山古墳というやや大形の円墳が注目される程度であるが、六世紀に入ると突如として、広島県最大の横穴式石室をもつ梅木平古墳が出現し、貞丸一・二号墳、そして終末期古墳である御年代古墳に至る。こういう過程は備後の中心地域と極めて類似している。特に御年代古墳は、花崗岩の切石で構築されていて、備後の終末期古墳と同様に畿内色の濃いものである。

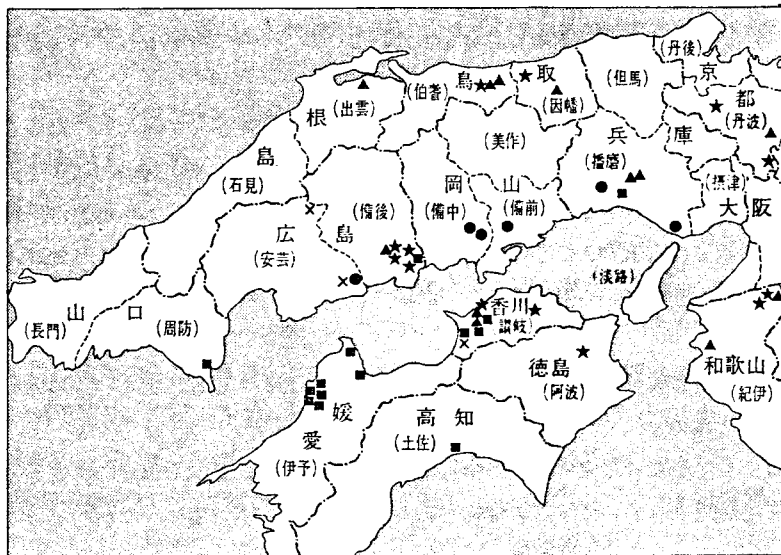
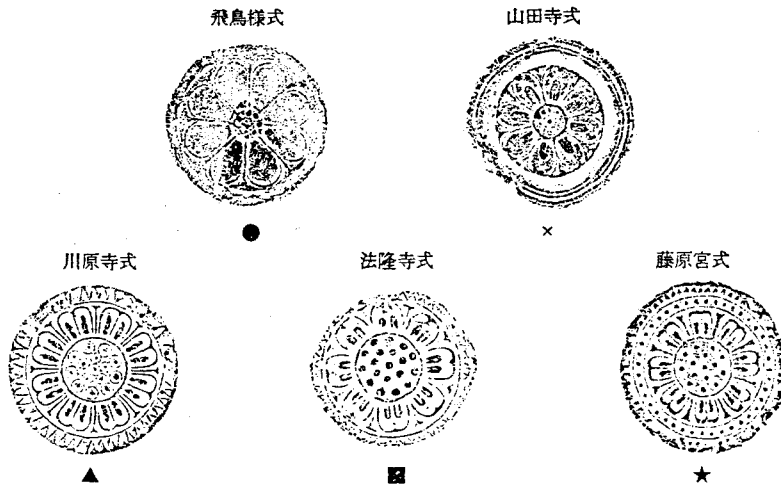
それと共に、この地域にも屯倉は設置されていた。沼田川と旧山陽道との交点に三田という地名があり、これも又、備後の状況と極めて似ている。

畿内政権の吉備征圧過程に於て先にみた様に備後の中心地域に集中的に置いた屯倉は同時に安芸の国の最も備後よりの地域にも設置されていた。この地域もいうまでもなく、沼田川という河川があり、後の山陽道があり、瀬戸内海にも近く、交通の要衝であった。畿内政権はこの地域も掌握していた。吉備の西部に屯倉を置いて、やがて吉備の中枢部に児島の屯倉を置いて吉備を征圧して行った畿内政

権は備後に集中的に屯倉を設置すると同時に安芸の東南端にも屯倉を置いて横からだけでなく背後からも包囲していったのではないかと考えられる。その為の重要な拠点として、この地域を選んだと思われる。

この地域には沼田川があり、早くより山陰と山陽とを結ぶルートが開けていた。それは沼田川の支流の椋梨川上流に<sup>19</sup>タタラ製鉄の跡があり、沼田川流域を北上し、三次から東に分岐すれば古代出雲の製鉄地帯として名高い横田盆地に通じ、さらに三次より北方に「波多郷」があり、この波多の小川流域には「鉄(まがね)あり」と鉄の産出が出雲風土記に特記された所でもある。又、この「波多」は秦氏に通じ、かかわりが想定できる。

この様に、これらの人々をも含めて山の人々の生活集団、あるいは鉄を通じての民間ルートは古くより形成されていたと思われる。畿内政権はこの山陰と山陽を結ぶルートを掌握し、吉備の東西からの



主要中央(大和)寺院様式瓦の分布

松下正司「古代の地方史」による

征圧に加えて背後にもこのルートを通ってまわり込もうとしていた。それは、備北の庄原市高町に、小形の単葬墓ながら切石を積んだ構造をもつ篠津原三号墳があることから考えられる事である。さらにこの地域は、出雲の征圧へのルートの確保の為の中継拠点としての性格を持っていたと考えられる。それは、このルートを通じて備後の背後にまわり込めると同時に、出雲にも直接的に進攻できる位置にあたるからである。

沼田川支流の椋梨川上流の山中に「安宿」(アスカ)という地名があり、これが畿

内の飛鳥（アスカ）と通じる事や、飛鳥様式の瓦を出す横見廃寺がある点に於ても、いかに畿内政権がこの地を重要視していたかがうかがわれる。しかも、出雲の須佐の地にソガ川という川があるが、このソガも6世紀中頃より畿内政権の中に於て台頭して来た蘇我氏の蘇我に通じ、この地域より出雲に進攻していった結果としてとらえられるかも知れない。

この様にして、畿内の大王陵に肩比する程の巨大墳を築き得た吉備王国も、反乱を境にして周囲より、屯倉というクサビを打ち込まれてゆき、最終的に児島の屯倉に於て止めをさされていった。その吉備包括過程の一端をになった備後の地は、畿内政権と深いつながりを持って、全国的にも数の少ない特殊な終末期古墳を築いていった。

やがて、古墳時代が終っても畿内政権と深く結びついた人々によって畿内色の強い文様の瓦をもつ古代寺院が備南の地に乱立してゆくのである。

加えて、蘇我氏と深い関係をもちながら吉備包括の一端をになったはずの安芸本郷周辺は、備南地域に比べ畿内色の濃い古代寺院が少ないのは、あるいはもともと出雲征圧に重点を置いていたのかも知れない。

又、蘇我氏の滅亡と何かかわりがあるのかも知れない。

#### <参考文献>

- ① 西川 宏 「古代の地方史」 朝倉書店 1977年
- ② 前掲①
- ③ 佐原 真 「農業の開始と階級社会の形成」 岩波講座日本歴史1 岩波書店1975年
- ④ 前掲①
- ⑤ 笠野 毅 「大市墓の出土品」書陵部紀要27 宮内庁 1975年
- ⑥ 前掲⑤
- ⑦ 前掲①
- ⑧ 前掲①
- ⑨ 森 浩一 「日本古代史における鉄問題の推移」 日本史の研究29
- ⑩ 前掲①
- ⑪ 〃
- ⑫ 本谷遺跡調査団 「本谷遺跡発掘調査概報」 福山市教育委員会 1973年
- ⑬ 前掲①
- ⑭ 〃
- ⑮ 〃
- ⑯ 〃
- ⑰ 〃
- ⑱ 〃
- ⑲ 門脇禎二 「出雨の古代史」 NHKブックス 1983年
- ⑳ 前掲⑱

（古墳研究部会副部長）